

多元的身分関係と私領没収権

鎌倉時代後期の村落上層民について

小 谷 利 明

鎌倉時代西国において社会問題となっていたことの一つに、一般住人が神人や寄人となり、寄沙汰狼籍を行っていたことがあげられる。鎌倉幕府追加法には神人について「西国住人等号^ニ神人^一、構^ニ事於左右^一、好^ニ寄物功物之沙汰^一、致^ニ狼籍^一」^①としていたことや、「西国神人拒捍使等、或平民或以^ニ甲乙人之所従^一、令^ニ補^ニ神人^一」^②めていたことが知られる。ここで幕府は、新加神人の停止と神人交名及び在所注文の提出を命じている。この外、山僧の地頭代禁止なども度々みられることである。^③

これらの階層は、鎌倉後期には悪党の一部を構成するわけだが、彼らは神人・寺僧・寄人などの身分を権門から受ける一方、他の権門の下級荘官や名主・百姓である場合が多くみられる。大和国では、興福寺が鎌倉中期以降、悪党的な性格を有する階層を自己の被官にとりこみ、衆徒・国民層の拡大がなされたことは、渡辺澄夫氏の研究^④などからうかがうことができる。

これら他権門と身分関係を有する現象について、その支配の本質について考えると、竹内理三氏が「荘園制と封

建制^⑤」のなかで示された土地支配と人支配の二元的性格と不可分に結びついていると思われる。村井康彦氏は、竹内氏の莊園制理解とその対極をなす石母田正氏のいわゆる「寺奴の論理」を比較しつつ、土地支配が先行し、その後において人間支配を包含するに至る莊園Ⅱ「懇田地系莊園」、人間関係が先行しやがて土地関係に及ぼされて成立する莊園Ⅲ「雜役免系莊園」と類型化し、莊園の成立事情の問題に還元された^⑥。莊園における諸役負担体系からみるかぎり、この指摘は正しい。しかし、莊園支配によって一元的に人的支配を行ない得たのはごく一部であったと思われる。竹内氏はこの二元的支配を室町初期までみられるとするが、朝尾直弘氏が『公儀』と幕藩領主制^⑦において武家領主権力の二元的要素として「いずれも、領主力が領民に負担を課そうとしたとき、領民が個々の家臣や寺院への隷属関係（したがって役儀の提供）を理由にそれを免れようとしており、しかも免除を願う主体は「郷」・「地下中」・「町」など領民の属する地縁団体（共同体）であるという特徴をもっている。個々の領主は主従制の論理にもとづき、その支配を在地におよぼそうとして、個々の領民と主従関係を結ぶ志向を有するのであるが、そこで結ばれた主従関係は、領主たちが一定地域の範囲でまとまって形成した領域権力の強化に障害となっていた。かりに、領民のすべてが個々の領主と主従契約を結んだとしたら、領域権力が領内に家別負担を課したとしても、村や町は免除対象民のみで構成され、負担を実現することはできない。領域権力の支配と個々の領主の主従制支配とは明らかに矛盾に直面していた。」として、百姓・町人支配に対する領域権力が直面していた問題に、私的主従制があつたことが指摘されており、権力側にとって一元的支配は、中世を通して終ることのない課題であつた。ただ朝尾氏が記されているとおり、中世後期にはこの私的主従制が「郷」・「地下中」・「町」などの地縁的団体によっているのであり、この点、中世前期は、村落上層民が個別的に主従関係や身分関係を結んでおり、多くの例外を含むであろうが、村落の共同体的規制が村落上層民を規定するまでには至っていないと考えられる。こ

の点で中世前期の村落と後期の村落とをそれぞれ区分して考察する必要がある。

以上で示した諸見解は、二元的支配として説明されているが、荘園制社会において農民自身の諸活動に視点を向けて考察するならば、多様な身分規定が存在していると考えられる。富沢清人氏は「『在家』の身分的性格について——中世農民論の前進のために——」^⑧で荘園制支配下の農民について次のように記されている。「荘園制下の『多元的支配関係』とは、そのような特質をもつ公民（多様な生産諸活動を未分化のまま体现している公民——筆者注）を、その生産活動の個々の側面で秩序付け、身分的に編成した結果である。支配の多元性の本来の意味は、生産諸活動の個々の側面を通じて多元的な身分関係をとり結んでいながら、その関係がどれも他を全面的に規定しうるものになりえないことである。その意味で公民は『多元的支配関係』の下にあったといえる。」としてゐる。富沢氏は、主に公田支配と在家支配との関係からこの問題にせまっており、特に中世的領域支配である公郷在家役が考察の中心であった。小稿は、この富沢氏の立論を受けて、特に中世前期の村落上層民の身分的特質を考察し、それを規定しようとする権門の行動が特に住宅破却や私領没収に集中することを考察する。

ところで、最近の中世村落の研究は、黒田俊雄氏^⑨、大山喬平氏の村落の二重構成からなる共同体を中心に論義がなされている。榎原雅治氏は、「中世前期村落の一特質について——近江国葛川にみる身分体系の検討——」^⑩で中世村落の二重構成が中世前期・後期に同様にみられるのに対し、前期村落の特質について「特に注目したいのは農村における名主に限らず、前期村落にあつてはしばしば住民の一定部分が供御人とか神人などとして領主から編成されることが示すように、二重構成が領主側の設定する身分体系となつて現われる点である。この身分編成の意味とりわけそこに村落が全体としてもつ領主支配との中世前期特有の矛盾を見出す必要がある。これに関して既に分裂支配Ⅱ身分的分断という指摘がある。そこでは、村落上層にのみ特権が与えられたことにより全村落の連帯は

阻止されたこと、そしてこれが克服されて後期村落に移行することが主張される。確かに全村落の連帯が阻止されたことは村落にとって負の要素ではあるう。しかしそれがそのまま村落全体にとっての克服課題となりうるだろうか。なぜなら分裂支配下における村落上層の特権を重視する限り分裂支配克服の主要な担い手は非特権層である筈にもかかわらず、後期村落においても村落の階層性は失われていないからである。」として、中世前期の農民が領主の身分体系によって分裂支配をうけたことが問題とされている。小稿もこの問題とかわるが、村落上層民の身分獲得がこのような荘園領主と別の領主との関係を問題としている。これは中世社会が、非一元的な支配関係がその特質であるとする認識とともに、農民の自立的運動をこの点で考えてみたためである。

最近、坂田野氏は「中世村落研究と人的結合関係論」^⑩で最近の中世村落研究の現状について整理され、百姓のイエ形成過程の研究、族縁（血縁）的關係の研究、地縁的結合關係の研究、村落内部の身分秩序の研究の四つの視角を示されている。かかる視角は、中世村落の内部構造を分析するのに有効な方法であり、中世村落史研究の一定の進歩を示すものだが、中世村落がどのようにして中世国家を規定していたかといった視点は十分にはみえてこないのではないだろうか。富沢氏が「支配の多元性の本来の意味は、生産諸活動の個々の側面を通じて多元的な身分關係をとり結んでいながら、その關係がどれも他を全面的に規定しうるものになりえない」としたように百姓を一人の領主が全面的に規定できない關係こそ、貴族・武家・寺社等の領主階級の共同支配としての中世国家が存在したのではないだろうか。

小稿では、大和国平野殿莊を中心にしてこの問題について考察する。^⑪

東寺領大和平野殿莊は、もともと宣陽門院領であつたのが、暦仁二年（一二三九）仁和寺菩提院門跡行遍に与えられ、行遍が東寺一長者であつた關係から建長四年（一二五二）東寺に寄進され、東寺供僧料に宛てられた。

この莊園に関する研究史については、佐藤和彦氏がまとめられているので、それに譲りたい。

平野殿莊の構成についてまずみると、莊官は下司と惣追捕使があり、これと名主層を含めた村落の上層が同族の平氏一族で占められ、その下に一般百姓が存在した。「当庄百姓大旨興福寺々僧候間」^⑤とあるように、彼ら上層農民は興福寺の僧であり、これについて東寺側は他莊との特異性は指摘するものの、これに対して身分規制を行なおうとした様子はない。彼ら名主層は、それぞれ私山を有し、松茸などの年貢は出しているものの、文永六年九月二十七日名主連署状案で「山をきるよし不_レ申上_二候、此条昔者のやまにて候を、券驗をもちてはやして候、松茸をい候へハ、進候、候はねハ力不_レ及候、いつれの私山も切候時、申例不_レ候うへハ、不_レ申候」とあるように山立木に対する伐採に関して強固な私有権をもっていた。網野善彦氏は、これら私山の伐採について「活発な松木の伐売に集中的に現われるように、名主たち、平民一族の流通への積極的な関わりをその根底にもっていたとみることができよう。」^⑥としているが、この私山の伐売流通との關係こそ、平氏一族が興福寺僧やのちにみるように一乗院坊人となる根本的な要因ではなかったろうか。黒田莊住人大江良永が興福寺西金堂寄人となった動機は、「南都昼夜往反之間、於道路不慮外僻事可_二出来_一之故、為_レ妨_二其難_一」^⑦であつた。この問題は、これと同じ性格を有するのではないかと考えるわけである。この点、隣接する莊園が興福寺一乗院領であつたことも大きな要因であつたと思われる。大和国において守護が設置されず、大和国の守護を自称する興福寺権力と結びつくことで彼ら名主層は、自己の經濟

活動を有利に展開できたものと考えられる。これは、葛川などの事例と対称的な身分關係をみせる要因であるわけだが、これを大和国の特異性とみることなく、彼らの活動を保証する権力がどの権力であつたかが問題であるだけである。この点で前記したように、山立木の伐採に対して東寺側に干渉させない名主たちの態度は、独自に自己の経済活動を保証する権力を必要としたのである。

このように平野殿莊の名主・莊官でありながら、興福寺僧あるいは一乗院家坊人であるという当莊の特質は、複雑な政治問題を内包していた。

まず初めに東寺と興福寺が対立した事件は、文永十年前後にみられる。

平野殿没官領事、自_二靡殿_一被_レ申候之間、先立可_レ拔_三點礼_二之由、被_二下知_一候了之由、可_レ申旨所_レ候也、恐々謹言、

文永十一年

三月四日

快増

(実見)
修南院御房

19

これによれば、平野殿莊の一部が没官となり、一乗院が点定したが、一乗院信昭の祖母靡殿の取次により点礼が抜かれたことが知られる。この事件の一端は、正応二年（一二八九）一月平野殿莊雜掌重言上状に、「爰故一乗院殿御時、依_二舜継・鶴丸之罪科_一、被_レ點_三定其跡_二云々、ソフ／＼・杜下・ハナレオ・大門北山已上四ヶ所ニ、自_二一乗院殿_一雖_レ被_レ下_三點礼_二とあるのは、このことを指すものと思われる。舜継は先にみた名主連署状案に名まえのみえる有力名主である。

ここで彼らの私山等が点定されたのは、一乗院家との個別人身支配によるものとみられる。これと同様の性格を有するのが、正応元年の下司平清重と惣追捕使平清永の鬭争事件である。この事件によって、下司清重・惣追捕使

清永は東寺側によって所職を改易され、所領が点定された。これに対して清重は、一乗院坊人であったため、一乗院側によって屋敷以下山林が点定された。清重と清永は親類であり、酒宴の席での喧嘩であったらしい。ここで清重の屋敷山林が一乗院によって点定され、清永に関して一乗院からの干渉がなかったのは、彼が一乗院となんら関係がなかったためであり、これからも先の舜継・鶴丸の点定事件も含めてこれらの一乗院の行為が個別人身支配の原理による点定であったことを確認しておきたい。言葉を変えるならば、この一乗院の行為が、興福寺の大和一国権支配とはなんら関係がないことである。

この事件はその後清重の山林に関する点定が争点となった。これは清重の屋敷が母の所持であり、彼は寄宿していたので住宅は破却したが点札は退けたためであった。そこで東寺と一乗院が相論の対象とした「馬場登の山松林」に関する両者の主張をみてみる。一乗院側は、「彼松山等同妻女之領ニ候て、於清重者、自母手皆譲得候之間、被點定候早、已前御沙汰にハ相替候、所詮候、千万之子細暫閣之候、如レ此所領之習、以三文契可レ被治定候、已前如申上候、実事平野殿領候者、定文書分明候歟、早可レ被召出彼文書候、不然者、任先傍例、御房人并御領百姓等之所領、院家御進止之条、不可有子細候」として、この山林が平野殿荘領ではなく清重の母から清重へ譲られた所領であるとし、これらの所領の進退権は一乗院にあることを主張した。

これに対し、平野殿荘雑掌が主張したのは、「被召上院家御領之所領、被行其身於罪科之条、不レ及申子細、至于当庄領者、非御綺之限歟、尤可レ足高察矣、所詮、於彼屋敷以下山林者、自往古為当庄之条顯然也」として、山林が平野殿荘領であることを主張し、またこれの根拠として舜継・鶴丸が一乗院よりその山林等を点定されたとき、この事件に関与した清重の父清宗が当時所持し、現在問題となっている龍馬場の木を城郭の柵として切採ったため、故菩提院僧正行遍によって清宗を改易したことを記している。

ここで問題となっているのは、この山林が平野殿莊領であるか否かという点にある。しかし両者の主張は、論点にずれがある。東寺側が、この山林が平野殿莊内に存在することを問題にするのに対し、一乗院側が問題とするのは、この山林が清重の相伝の私領である点にある。

この山が、基本的には莊園領主の支配下にありながら、その規制にとらえられることのない多様な生産活動を山主とよばれた村落上層は保持しているのは前述した通りである。^⑧このような関係こそ一乗院が彼らの私山を点定することを可能にする側面が存在するのであり、強引にみえる一乗院側の主張の根拠は、この点に内包されていた。

そこで東寺側の主張のなかにも、清宗の山主としての違乱行為に対して所職を改易した主張が示されるのであり、ここで両権力の私領没収権が人的支配関係としてあらわれる基本的な原因である。

また、一乗院側にとって莊園領主による私領没収権を認めることは、一乗院と個別人身関係をもつ人間とを恒常的に再生産することを阻害する可能性があり、積極的に私領没収権が一乗院が保持していることを主張しなければならぬ原因であった。

この相論が行なわれているなか、今度は一乗院衆徒が人夫役や兵糧米を徴収するなどの行動にでてくる。^⑨しかし、これも興福寺公人等ではなく、一乗院によってなされたことはやはり注意しておく必要がある。

また、舜繼・鶴丸事件と清重・清永事件の調度中間にあたる弘安九年（一二八六）にも興福寺使が莊内に入部したことがある。^⑩これが一乗院方の衆徒であったか、あるいは興福寺公人等が中心となった入部であったか不明だが、この時使新として年貢が立用されたことがみえ、後にみる延慶年間の年貢立用が莊内の対立となったのとは対称的に、重大な争点とはならなかった。この年貢立用といひ、文永年間の東寺への人夫役拒否といひ、下司・惣追捕使・名主層を中心とした百姓結合は、莊内に一乗院衆徒の入部などによる混乱をみたものの、両権門の役負担を全面

的に百姓に転嫁することを村落上層によって阻止されており、この点で強剛名主とよばれた村落上層の悪党的行動も、ある程度一般百姓層の支持を得ることができたのである。

三

以上みてきたのは、興福寺と平野殿荘との関係は、興福寺の門跡家である一乗院家との個別的な人的支配関係として展開することがわかった。この後、興福寺は度々大和一国支配権から平野殿荘に入部し、役負担を課すのだが、これはやはり一乗院と平野殿荘の村落上層民とのかかわりから発展したものと考えられる。そこで個別人身支配から大和一国支配権行使の地域「公人入部之地」への発展について考察する。まず平野殿荘をみるまえに、興福寺公人の早い事例として、また興福寺総寺体制の検断システム^⑭の考察として稲葉伸道氏・田村憲美氏^⑮によって取り上げられた弘長元年（一二六一）六月三十日喜殿田永荘荘官百姓等解^⑯についてみることにする。

事件は、興福寺が公文を関東へ下向させる用途銭を国中富有の輩に宛てたため、田永荘得光名主九郎則綱の住宅に譴責の使者が付されたことから起こる。ここで田永荘側は、当荘は四條宮（後冷泉天皇皇后藤原寛子）の時に立券荘号された荘園であり、天下一同の課役・国中平均の催促は別勅がなければ承引しないとして拒否した。はじめに則綱に付された使者が興福寺のどの機関の使者であるか不明だが、この問答のち再び譴責に來たのは、興福寺公人・郡司刀禰及び堂家使者であった。稲葉・田村両氏の研究からわかるように、興福寺の大和一国支配権が行使されるとき、それを執行するのは公人・郡司刀禰であるわけだが、ここで堂家使者が関与したのはいかなる理由によるのだろうか。同解によれば、これ以前嘉禎年中に田永荘百姓窪四郎国次が勾引を行なったため罪科に処せられたとき、国次は東金堂寄人と号し、堂家使者と語って田永荘に乱入する事件があったことが知られる。国次がほ

んとうに東金堂寄人であつたかどうかは別として、東金堂家と田永莊はなんらかのつながりがあつたのではないだろうか。おそらく田永莊内には東金堂寄人が存在していたものと思われる。また、この国次事件後には、宝治年中、やはり同莊百姓貞行と興福寺公人相有専当が語つて同莊車木郷百姓宅を焼き払うといった事件も起きており、兩事件ともそれぞれ所職が改易されるなどの処置が藤氏長者によってなされている。

この点、田永莊内には興福寺となんらかの關係を有するものが存在しており、今度の名主則綱に対する譴責が堂家使者を供なつたのも、東金堂との關係が在地に存在したためであらう。

この点で、この史料は興福寺の一機関と個別人身支配にある人間に対する支配から、莊内全体に興福寺權力を及ぼそうとする過程を示すものである。

この例からも、平野殿莊の事件が特別な事例であつたとはできない。再び平野殿莊についてみていこう。下司清重と惣追捕使清永との鬭争事件後の一乗院使などの入部による莊内の混乱のなかで、今度は仁和寺菩提院と東寺供僧中との間で預所補任をめぐつて対立が起こる。このなかで仁和寺菩提院より新たに補任された下司金寿丸は、正応三年興福寺使を入部させる。これは、「過事候ハぬ百姓お、新下司仁可^ニ相隨^ヒ請文任^ヒと候て、南都寺家御使お新下司殿当庄へ被^レ令^ニ乱入^一候之條、今月十六日にて候、」とあるように、金寿丸は百姓支配を行なうために興福寺の武力を利用したのであつた。しかもこの時、莊内に入部したのは、翌年の正応四年九月十八日伏見天皇綸旨案[㊤]に「南都公人狼籍」とあることから、興福寺総寺体制が介入してきたのであつた。

これによつて金寿丸は下司職を改易され、東寺供僧中によつて再び清重が下司に補任されることになる。これは、清重の在地支配能力をかわれてのことであらう。また莊内からみれば、清重は役負担を全面的に百姓に課す存在ではないという認識が百姓等にあり、在地からも受け入れられる存在であつたと思われる。

しかし、正応六年ごろからはじまった隣荘の一乗院領安明寺・吉田荘との山林相論は、一乗院方百姓の荘内乱入によって決定的な混乱状態に入った。^{②③} 正安二年（一二九九）十二月二十六日興福寺下所司琳賢申状からもうかがえるように、興福寺は平野殿荘を「公人入部之地」と決めつけ、検断権や郡使供給雑事等の負担を課す強行な姿勢をみせるようになる。これ以前の段階が、一乗院との個別人身支配による間接的な支配を及ぼそうとした段階から、興福寺による一國平均役賊課・検断の及ぶ対象地としての位置づけがされる段階に入ったといえる。

これに対して東寺は、一乗院百姓の狼籍を停止するよう諭旨を受けるが、これをとどめることができず、すると永仁三年十月平野殿莊雜掌申状土代にみえるように、これらの在地の混乱による年貢未進を下司・惣追捕使以下百姓の責任として追及する方向に向かうようになり、幕府に訴えることになる。ここで下司清重・惣追捕使願妙は、一乗院坊人と再び称してこの追及をのがれようとするが、かえって自己の立場をなくし、すると清重は請文を東寺に出して、惣追捕使願妙に一切の責任を負わそうとするなど、この当時はまさに「御りやうか二つに候」ような状態となり、^④ 下司・惣追捕使の下に荘内の百姓がそれぞれ帰属する状態であった。

このように興福寺の「公人入部之地」としての度々の荘内入部と東寺による下司以下の責任追及は、下司以下村落上層を中心とした百姓結合に重大な変化をせまった。つまり、前段階における村落上層の悪党的行為が課役負担を軽減する可能性を示していたのに対し、もはやこの段階ではそれが不可能となったからである。

これによって清重等の在地領主への道は、これまでの方法からでは全くとざされたといつてよいだろう。彼は博奕によって下司職をとられ、嘉元四年（一三〇六）には河内国御家人高安金翹王太郎とともに荘内に打ち入り勸農を打ち止めるという悪行狼籍に至るのである。^⑤

四

清重による荘内乱入後、平野殿荘内の土豪層による村落支配は決定的な打撃を受けた。

このうち、一乗院領吉田荘下司の子息平十郎光清が預所となることで、延慶三年（一一三〇）からは、荘内は預所と百姓層の直接的な対立となる。^④ここで平野殿荘内で問題となったのは、南都郡使入部費用の負担、一乗院領福基寺の召人を興福寺へ送進めるための負担と預所による武力的圧迫、預所の金勝寺乱入、土打役免除のための費用を出しながら預所が土打役を止めることができず、このための費用の返還、預所が吉田荘の下司の子息である点などであった。ここにみられるのは、預所光清が武力を背景に徹底して百姓に対して課役を負担させようとする姿勢である。これは、前段階でみられた村落上層を中心とした村落支配が、ある程度百姓役を軽減しようとした姿勢と決定的に違っていた。

ここに百姓は、自立的な行動をとらざるを得ない状況が生まれたといつてよいだろう。延慶四年一月二十八日百姓連署申状は、百姓が逃散もじさない姿勢を示す史料として佐藤和彦氏によってその歴史的評価が示され、田村憲美氏によっても惣村成立の出発点であったと評価されている。^⑤

小稿がみてきたように、村落上層民の多元的身分の存在が、荘内の役負担軽減を推進していた段階は、このとき完全に終了し、惣を中心とした新たな中世村落の段階へ向うのである。

註

- ① 『中世法制史料集』一、鎌倉幕府法第二部追加法六七
- ② 『同右』一、同追加法二三八
- ③ 『同右』一、同追加法一一六、一五〇
- ④ 「大和の悪党——弘安八年大和一国落書を中心として

③7 『同右』一八六三三號

③8 『同右』一八九二二號

③9 平野殿莊莊官連署請文案『同右』一九一三九號

④0 『同右』一九五八三號

④1 平野殿莊下司清重請文『同右』一九五六三號

④2 平野殿莊雜掌申狀案『同右』一二六五二號

④3 平野殿莊百姓等申狀『同右』一三三九二號

④4 『同右』二四一九三號

④5 注14論文